

2020年3月24日

関係各位

〒329-0611 栃木県河内郡上三川町上三川 2863-1

川島内科小児科クリニック 川島 隆

Tel:0285-37-7800/Fax:7811

コロナウイルス感染再陽性例(『直撃 LIVE グッディ』3月19日放送分)の見たの提言

小生、大学病院時代から超音波検査にこだわり続け、開業後は「臍臓」の存在を知り、今日までその大切さを訴え続けてきている一開業医（内科医・超音波専門医）です。

先般、ビデオで拝見した症例は、今の日本で起こっている新型コロナウイルス感染症を象徴する教訓的なケースと考えられましたので、私見をまとめ関係各方面に発信させていただくことといたしました。お忙しいところ恐縮ですが、最後まで目を通していただき、何かのヒントとしてご活用いただければ幸いに存じます。

結論から申し上げますと、この症例の腹痛の原因は軽い臍炎（臍負荷）と推定されます。臍負荷により再び免疫力の低下を招き、ウイルス感染症が再燃したと考えるのが妥当です。そして、再燃のきっかけは退院後に十分なお腹（臍臓）の安静が守られなかったこと（即ち、友人宅への外泊）が疑われます。海外旅行から帰国した方たちに発熱や胃腸炎症状（衛生環境が悪くない地域からの帰国者でも胃腸炎症状を起こし、大半は抗生物質投与無効例）が多いのは良く知られた事実です（クルーズ船乗客の方々には長期間の拘束による強いストレスも加わっていた筈です）が、身体やお腹がまだ十分回復していない状況下でストレスや緊張感から解放されて食欲が増し、以前と同様の食事を摂ることがトラブルの原因となります。大きな行事の後の体調不良（例えば、引っ越しの後やお孫さんたちが帰った後など）や看病疲れで子供さんの病気を貰うなどよく見られる光景ですが、この際にも「十分なお腹（臍臓）の安静」が必要になります。今回のケースでは体調不良を訴えるたびにウイルス陽性が繰り返されており、奥様が“体力がない方”と述べられている通り消化能力も弱い方と推定され、もう暫く十分な身体とお腹の安静に努めることで今後完治に至るものと推定されます（軽い臍負荷を客観的に確認・評価する方法は存在しますが、一般的ではありません）。

本来、日本人は臍臓の働きが外国人よりも劣る筈ですが、ご自分の体力や消化能力の限界を超えそうになると日本人特有の“弱さ”がブレーキとして働き、早めに“異状”に気付かせて身体を守るのです（残念ながら、このような大切なお腹（臍臓）の働きは理解されておられません）。もし仮にこの症例が体力のある方であったなら、発熱時に普通に飲食や水分補給を続けて臍負荷がさらに増し、典型的な重症化例に進展していたことも想定され、発病早期の対応が運命を大きく左右する可能性が示唆されました。現在、爆発的な感染拡大を示している諸外国と日本との発生状況の違いは、体力（お腹）の差も影響しているのかもしれませんが（男女の重症化率の違いも同様の機序が考えられます）。

最近、海外からの帰国者が新たな感染源となり問題化しておりますが、帰国後一定期間、お腹の安静も含めた身体の安静を守って頂くことを徹底化すれば、感染拡大防止につながるものと期待されます。

当院の発熱時の対応として、解熱後半日までは固形物は厳禁とし、口渇が強くても少量ずつの水分補給（氷片など）に留めておき（小児では低血糖防止のためにかき氷や『ガリガリ君』などのカロリーの少ない氷菓子のみ）、食欲が出てきた段階でも油断せずみそ汁や甘酒などの発酵食品摂取を推奨しており、長期の高熱の持続につながりにくくなっているものと感じています。

以前、NHKの『ためしてガッテン』のインフルエンザ特集で、流行期に学校の休み時間ごとの換気を実施していたにも拘らず集団感染を防げなかったとの報告がありましたが、十分な身体とお腹の安静を加えることで予防効果がさらに増す可能性が考えられました。一方、新型インフルエンザが日本で流行した際、耐性獲得から治療効果が期待できないと言われていた『タミフル』がお腹の安静を守ることで十分な治療効果を発揮した（大半が1日程度で解熱）ことは印象深い記憶として残っています。数年前、川崎市の幼稚園で週明けに繰り返された4歳児死亡例や日本の夏季に夜間・安静時に熱中症が頻発するのも、発熱時の身体とお腹の安静が十分保たれていないことが関係するのかもしれない。

発熱以外に発病早期によく見られる空咳（吸入ステロイドが有効）も、臍負荷の際に見られる肺のむくみによる症状とよく似ていますし（アトピー咳嗽とか咳喘息とも言われています）、発熱時に酸素濃度を測定することで新型コロナウイルス感染症に気付くポイントの一つとも考えられました。

そして、新たな感染源となっている医療関係者・患者家族・濃厚接触者や海外からの帰還者なども「疲労蓄積時の十分な身体とお腹の安静」が守られず発症に至ったとも推定されますし、糖尿病（これも臍臓に関係する病気です）・高血圧（臍臓が弱い方は本来細身であるべきですが、体重増加のストレスが血圧上昇にも関与）・基礎疾患を有する方たち（様々な病気にお腹（臍臓）は関わっています）の重症化率が高いのも、個々の体力（消化能力）の限界を意識しない初期対応が関係している可能性が考えられました。さらに、施設に入所されておられる高齢者（年齢に加え、寝たきり状態や運動不足で消化能力も低下している方たち）への食事や水分補給が臍負荷を助長する可能性も考えられ、胃瘻造設例や胃切除例では強制的な飲食の継続が免疫力低下を引き起こして新たな感染源になり得ると推定されました。

重篤なケースでは呼吸不全以外の死亡原因として全身性の免疫不全（SIRS：全身性炎症症候群）や循環障害（消化不良や全身浮腫による脱水）が認められますが、これらの病態にも臍臓が関与している可能性が考えられました。

一方、ライブハウスに集まってクラスターを形成した方たちは、若く・体力のある方たちですので、夜や週末で疲れている場面でもさらにライブ会場へと繰り出し、混みあう中で大きな声を上げ、のどが渇いて一気に水分補給を繰り返していたかもしれません。これではお

腹（臍臓）は黙っていない筈です。自宅に帰った後に発熱などが発生しても飲食を続けることで発症に至る（あるいはウイルスを拡散させる）可能性が増す原因の一つと考えます。

小生の印象では、新型コロナウイルス感染症の流行パターンはB型インフルエンザの流行とよく似ています。即ち、B型はA型と比べ発熱などの初期症状が軽い為、自覚症状のない方たちがウイルスを拡散させてしまい、だらだらとした流行が春休みまで続き収束を迎えます（最近の沖縄では体力や消化能力の低下する夏季に散発的にインフルエンザ流行を見ることが多くなっています）。そして、B型の発症者を調べるとA型より明らかに臍負荷の程度が強く（消化不良症状がB型に多い理由か？）、新型コロナウイルス感染拡大防止策の際にも、ウイルスの特徴を良く理解した上で、人の接触を制限する方策を講じる以外に身体（お腹）の安静にも気遣うことが早期収束につながると考えます。

高危険群の方たちはもちろんのこと、若く体力のある方でも発熱や風邪症状などがあつた場合には自宅安静（隔離）・外出時のマスク装着そして十分なお腹（臍臓）の安静に努め、他人への影響にも配慮することが重要であることは言うまでもありません。そして、軽い症状で回復したり症状が全くないケースでは自然に免疫が獲得され、早期の新型コロナウイルス感染症収束にも貢献できる筈で（集団免疫の獲得）、国全体の協力体制が重要です。

個人的には、人混みを極端に避けたり、感染防止策に神経質になりすぎる必要はないと考えますし（ウイルスが存在する環境下でも体力が維持されていれば何も起こりませんし、万が一感染したとしても初期対応を誤らなければ怖い病気には進展しない筈ですので、混乱を招きかねないPCR検査を積極的に実施する必要はないと考えます）、常にご自分の体力・消化能力の限界を意識して体調管理に努め、他人への迷惑も考えて行動すれば、諸外国とは異なる“安心・安全な国”に早晩到達するものと信じています。そして、今後も発生を繰り返すであろう「未知のウイルス感染症対策」にもつながっていくと考えます。

新型コロナウイルス感染症の初期対応や重症化・蔓延化防止にお腹（臍臓）への配慮も重要ですが、発症患者に対する治療薬と併行して臍炎治療薬の使用を試みたり（最近、東京大学からの発表がありました）、臍負荷に対するお腹（臍臓）の安静や脱水の監視などにも配慮することで治療効果がさらに増すことも期待されます。

小生の「臍臓」の認識は医者の方からは大きく外れた内容ですが、大学病院を離れても超音波検査にこだわり、患者さんにより近い視点で診るようになって初めて気付いたものですので、専門家の方々が奇異に感じられるのも当然です。しかし、現時点で問題解決に至っていない新型コロナウイルス感染症対策の1つのヒントになりうるものとして敢えて緊急避難的に意見を述べさせていただきました。日本の医療体制には様々な問題があるかもしれませんが、大病院に劣らぬ検査が開業医でも実施可能な状況にあることは非常に有難いと感じている次第です。

最後に、日本人の身体の特徴や健康意識の高さを基盤にして冷静・沈着な取り組みを続けておられる関係者の方々に敬意を表するとともに、病気で苦しんでおられる方々の早期回復と我慢を強いられている多くの皆様の早期復活を切に願います。